

〈研究ノート〉

フランス陸軍将校が見た 台湾近代史の転換期，1896 年秋

ワシーリー・モロジャコフ

要 旨

台湾の日本統治時代初期は、下関講和条約（1895年4月17日）と日本軍の最初の台湾出兵（1895年5月29日、基隆）から児玉源太郎陸軍中将の台湾総督任命（1898年2月26日）に至る時期で、台湾近代史の転換期であった。その時期に台湾を訪問した欧米人は少数で、彼らの残した記録には史料価値がある。駐日フランス陸軍武官クロード・ド・ピモダン少佐（Claude Emmanuel Henri Marie de Pimodan; 1859-1923年）は、駐日在任期間中（1896～1898年）日本各地、朝鮮半島、中国などを旅行した。ピモダンは、1896年10～11月日本陸軍高官視察団員（外国人の参加は一人）として台湾を訪問した際の旅行記（日記）を単行本『極東旅行記（1895～1898年）』（1900年）として公刊したが、これまで、著者もその作品も忘れさられ、研究されることもなかった。台湾の植民政策史から見れば専門的軍事・政治情報に乏しいが、ピモダンの日記は、現地の「生々しい」印象の記録であり、興味深い感想を含む。台湾人による反日ゲリラ戦争の性質と戦術、治安問題、雲林虐殺事件直後の現地台湾人に対する日本軍の待遇などについての証言、また初期における日本植民政策の問題に関する見解が見られる。史学的に見ればピモダンが語った出来事は「野史」と言えるが、「正史」の研究のためにも重要である。本稿は、その史料を紹介・分析するものである。

キーワード：台湾，フランス，日本，日記，ゲリラ戦争，治安問題，雲林虐殺事件

はじめに

1890年代後半は、台湾近代史の転換期であった。日本統治時代初期とは、下関講和条約（1895年4月17日）と日本軍の最初の台湾出兵（1895年5月29日、基隆）から児玉源太郎陸軍中将の台湾総督任命（1898年2月26日）に至る時期を指す。その時期に台湾を訪問した欧米人は少数で、彼らの残した記録には史料的价值がある。台湾に長期滞在していた欧米人の現地情報にはより詳しいものがあるが、彼の「生々しい」印象・感想も捨てがたい。本稿は、その一編を紹介・分析するものである。

1. フランス陸軍将校クロード・ド・ピモダンとその『極東旅行記』

1896年10～11月台湾を訪問したフランス陸軍将校クロード・ド・ピモダン（Claude Emmanuel Henri Marie de Pimodan; 1859-1923年）は、その旅行の日記を単行本『極東旅行記（1895～1898年）』（Promenades en Extrême-Orient（1895-1898）; 1900年）⁽¹⁾として公刊した。これまで、著者もその作品も忘れさられ、研究されることもなかったが、史料として注目に値する、と筆者は考える。

貴族の出身で、サン・シール陸軍士官学校を卒業したピモダン少佐（のち中佐）は、1895年秋、駐日陸軍武官に任命され、同年12月末マルセイユから出発して1896年1月29日横浜に到着した。任期終了後ピモダンは1898年4月、日本を出発し、中国を訪問して帰国した。駐日陸軍武官としてのピモダンの活動は本稿では取り上げない。

ピモダンの駐日在任中の感想と旅行記は『極東旅行記』として出版された。フランス語の表題にある「promenades（プロムナード）」は一般的に

「散歩」の意味だが、旅行記の表題としてよく利用されている。ニュアンスは「voyage (ボアヤージュ)」に比べると観光の意味に近く、書名としては専門書より一般読者向けのイメージである。同書刊行前後、ピモダン は、オーストリア・ハンガリー帝国、バルカン半島諸国、トルコなどの旅行記『ゴリツァからソフィアまで』(De Goritz à Sofia; 1893年)とアルジェリアの旅行記『オラン, トレムセン, 南オラン』(Oran, Tlemcen, Sud-Oranais; 1903年)を出版している。当時、海外勤務のフランス陸海軍将校はよく旅行記や実体験に基づいた小説を執筆していた。東亜、日本を描いたフランス軍人作家の内、ピエール・ロティ (Pierre Loti; 本名 Louis Marie-Julien Viaud; 1850~1923年)とクロード・ファレール (Claude Farrère; 本名 Frédéric-Charles-Pierre-Édouard Bargone; 1876~1957年)は世界的に有名になって、アカデミー・フランセーズ会員に選出された。在任中に小説を執筆するフランス軍人はよくペンネームを使った。

ピモダンの『極東旅行記』は、二部に分けられる。第一部は、ジャンルとしてガイドブックに近い「日本」(87~248頁)で、知識一般に限られるので、史料としての興味は乏しい。第一部は、旅行の日記で「マルセイユから横浜まで」(1~86頁)、「フォルモサ〔台湾〕, ペスカドール〔澎湖諸島〕, トンキン (1896年10~11月)」(249~286頁)、「蝦夷〔北海道〕, シベリア〔沿海州〕, 朝鮮 (1897年8~9月)」(287~333頁)、「中国 (1898年4~5月)」(335~376頁)を含む。その内、当時外国人が殆ど訪ねることがなかった台湾と北海道のアイヌ人村に関する記録が史料として最も興味深い、と筆者は考える。ただピモダンが出版のために原稿を準備する際、日記を書き直したかどうかは、はっきりしない。

ピモダンの台湾旅行記は、一般読者向けであり、序文として台湾の地理と歴史について簡単な説明をしている(250~251頁)。日記には、専門的軍事・政治情報こそ少ないが、現地の「生々しい」印象の記録と共に興味

深い感想が述べられている。ピモダンの文章には、当時フランスで人気の他の旅行記と同様、エキゾチックな景色の描写と様々なエピソードが多い。軍人であるより文人として執筆したピモダンは、日記を書く時にも読者を意識していたのか、見たことを全部描いたのか、旅行後にフランス陸軍省・参謀本部宛職務報告書を執筆したのか等々、はっきりしないこともあるが、いずれにしてもピモダンの著書は欧州で生まれ、日本、台湾、中国のイメージ工作の過程に一定の影響を及ぼしたので、それを紹介・分析することは歴史的に価値がある、と筆者は確信している。

2. ピモダンの台湾旅行の状況

ピモダンは、日本陸軍高官と一緒に、視察団中唯一の外国人として台湾を訪問した。団長は陸軍参謀本部次長川上操六中将（1848～1899年）であった。団員は、伊地知幸介大佐（1854～1917年。のち中将・第3軍参謀長）、明石元二郎少佐（1864～1919年。のち大将・第7代台湾総督）、陸軍省医務局長石黒忠恵（1845～1941年。のち日本赤十字社社長）、陸軍主計総監野田豁通（1844～1913年）とそのスタッフであった。日本語能力が殆どないピモダンは日本人二人、日本語・フランス語通訳とボーイを雇って旅行した（団員一覧、249～250頁）。

この視察団が台湾を訪問したのは、桂太郎第2代総督が台湾を去り、後任者の乃木希典がまだ着任していない時期であった。視察の理由と主な目的は以下の通りであった。

最近台湾⁽²⁾で反乱が起こった。島は見かけ上、鎮静を装っているが、島内には実際、かなりの緊張と不安が走っている。……日本人は、台湾の困難な事態に直面してその問題を検討した際、植民地で同様な問題が起こった場合、欧州人がどのように対処するかを調査する必要を

感じた (249 頁)。

1896年10月22日、視察団は基隆に到着した。ピモダンは、この町を「寂しい」と感じ、フランス軍人墓地を訪ね、1884～1885年の清仏戦争とアメデ・クールベ海軍大将 (Amedée Courbet; 1827～1885年) が指揮したフランス極東艦隊の戦いに思いを致した (251 頁)。基隆から台北⁽³⁾まで視察団は鉄道で進んだ。途中ピモダンは、戦闘の被害を見つけて、反乱者の戦術について以下の通り記録した。その説明は明らかに日本軍人の質問に答えたものである。

駅の側に私〔ピモダン〕は、近頃戦闘で焼き捨てられた村を見つけた。反乱者は鉄道員を攻撃する。攻撃が度重なるので、高地には歩哨が設置されている。一般の予期に反して、日本人の実際の敵は、台湾中部の野蛮人〔原住民〕ではなく、清軍の元兵士である。彼ら〔反乱者〕はひととおりの軍事訓練を受けており、武器として素朴な槍だけでなくモーゼル小銃も持っている。彼らは仲間を作って、殆ど全ての同胞からかなり有効な支援を期待することができる。

反乱者は、繰り返し村を占領し、その近所を制圧して、日本人を殺戮したのち都市に入って驚くほど大それた襲来を行っている。〔日本〕当局が彼らと戦うために出兵すると彼らは、一部は難攻不落の山林に隠れ、一部は武器を隠して平和的に農作業を続ける。

のち仲間を別の場所に集めて、強盗行為を続ける。自分の利益のために戦う彼らは、清軍の兵等と違って死力を尽くして戦闘している。……25～30万人の野蛮人〔原住民〕は、日本人も中国人も憎んで、あちこちで殺人・略奪をしている。日本人も反乱者も彼らを自分の方へひきつけるために努力している。野蛮人は、全てを受け取って、無関心に両方を援助しても、両方を裏切る (252～254 頁)。

結論として言えば、ピモダンは台湾に到着してすぐに日本の地方行政と陸軍の困難な状態とゲリラ戦争の脅威と危害を理解した。

3. 台北の感想

台北でピモダンは23日、現地の欧州人、商人と宣教師に会って挨拶を交し、24日の市内見物には川上中将に随行して、26日に淡水を訪ねた。彼の見聞では、中国人が島内の商売を全て統制していた。ピモダンは、当時台湾の開拓を試みた日本人は「多くは資本も融資もなく、ただ一攫千金を求めるだけで、結局、運にも商売にも恵まれなかった。……初期の「泡」が殆ど消えて、その代わりよりまじめな人物が来る」と記録している(254～259頁)。「よりまじめな人物」は乃木総督のちに児玉総督の指導下に台湾の開発、近代化を進めていった。

日本人は台湾を「そのまま引き受けたので、状態を改善するために自分の短期的経験だけでなく、欧州植民政策の膨大な経験からも方策を探している」とピモダンは述べた(256頁)。この短い文句から日本の植民政策の主要な問題が明らかになる。第一に、日本の植民政策方針は、植民地の「収奪」ではなく、開発と近代化にあったので、明治維新以降の国内開発、近代化の経験を利用していた。現代において「植民開発論」は政治的な理由のため批判されているが、歴史的に検討すれば日本の台湾政策は、開発の政策、近代化の政策として行われた、と結論できる。第二に、日本の植民地行政官は、海外の経験から学ぶ希望、素質、用意があったのか、台湾総督府の場合、後藤新平とそのチームは他国の経験から学ぶのに成功した行政の模範となった。

ピモダンが台北について感想を述べた次の二つのエピソードは、時代の歴史的な目印として興味深いと思われる。「小さい工業博物館の見学中」彼は阿片生産の過程、生産された阿片の品質テストを視察することができ

た。阿片喫煙者として特別な技能がある中国人はその味を鑑定した(257～258頁)。台湾で日本行政は、阿片の生産と販売を国家独占にして、阿片を中国に輸出すると共に、国内阿片の常用を禁止する試みをした。台湾に在留している西洋人の一部と彼らから情報を得た欧州の新聞・雑誌はその政策を批判したので、日本側から見れば阿片の生産・販売は手痛い問題になった。その解決の対策は、総督府顧問の英国人ウィリアム・マイヤース(William W. Myers; 1845～1920年)が1896年10月に提出した意見書の内容と忠告を部分的に利用して、のち後藤新平が提案、実現している⁽⁴⁾。外国人専門家は台湾で行われた「阿片対策」を高く評価したが、列強からは批判・非難も強かった。そのため西洋人の意見・発言に感度の高い日本行政は、阿片生産の過程とその品質テストを親日と知られている訪問客のみに展示していた。ピモダンは、阿片の味を鑑定する中国人を視察して、1840年代バリで有名な『ハシシュ・クラブ』(テオフィル・ゴーティエ, シャルル・ボードレール等フランス文人多数)を思い出した。奇しくもその参加者が集まって阿片を常用した場所は『ピモダン館』(Hôtel de Pimodan)であった⁽⁵⁾。著者との直接な関係がはっきりないが、同じ家紋を持つ一族の不動産であったらしい。

もう一つのエピソードは原住民種族の族長との会見である。族長は台北に来て、川上は好奇心から彼を招待した。好奇心旺盛なピモダンも出席して、会見を以下のように描いた。

滑り出しはよかった。野蛮人はお菓子を食って満足したらしい。しかし、〔川上〕中將が彼に酒〔日本酒〕を御馳走した時、野蛮人は顔をゆがめ、のちには酔いが回って、西洋酒のほうが日本酒より良いと言い出し、日本人に対してかなり失敬な言葉を吐いた。

川上もピモダンも原住民のことばを一言も理解できなかったが、誰が日

本語とフランス語に通訳したのかははっきりしない。「そのかわいそうな野蛮人が最も未開の人物である」とピモダンが会見の記録を締めくくった(259～260頁)。当時の「開けた白人」の代表的なコメントではないかと結論できる。

4. 団体の経路と途中感想

日本陸軍高官視察団は、10月26日台北を出発して、南方に向け旅行を続けた。人数が多かったので視察団は三つの組に分けられた。第一は石黒、野田とそのスタッフ、第二はピモダン、日本陸軍少尉一人・下士官二人、日本人の中国語通訳、ピモダンの日仏通訳とボーイ、第三は川上とそのスタッフであった。ピモダン組では、恐らく少尉が団長、下士官が警備であった。荷物などを運ぶ中国人ボーイも行ったが、ピモダンは彼らの存在を無視したらしい(260～261頁)。陸軍高官から離れたピモダンの旅行は観光に近くなった、と結論できる。

ピモダンは、列車に乗って27日新竹に到着して、「ルーマニアの平凡なホテルより楽しい宿舎」に一泊休んだ後、28日後龍まで籠に乗って旅行を続けた。中国人赤帽の喧嘩を見たピモダンは彼らに対して軽蔑的なコメントをしたが、彼らの忍耐力と我慢を高く評価した。29日大湖で現地歩哨長の日本人将校はフランスで留学した際、ピモダンを「最も友好的に迎えた」(262～264頁)。

30日台中でピモダンはマラリア病患者多数を見かけて町の衛生状態が悪いと記録した。警備の下士官は台北に帰るので、台中の警察官二人が彼らと交代した。ピモダンは、下士官と最後の挨拶を交して、二人の「素晴らしい姿とマナー」を強調した。11月1日彰化でピモダンは「兵舎で大きい中華風の部屋に泊まった。熱病にかかった北白川宮〔能久親王〕が、死亡直前に利用した部屋である」(265～268頁)。

ピモダン組は、2日北斗で一泊して、3日雲林に到着した。雲林でピモダンは明治天皇誕生日の祝賀行事を見たが、その出来事は後文で分析する。4日雲林から嘉義まで行く途中でピモダンは反乱の被害を見つけたが、嘉義の防衛体制と要塞を認めた。守備隊長原田少佐はピモダン自身と同じサン・シール陸軍士官学校の卒業生であった(268~271頁)。

5日ピモダン組は、中国人苦力が動かしているトロッコに乗って嘉義から出発して夜頃台南に到着した。この「台湾で最も通商が盛んで、最も清潔な都市」で著者は、反乱のため捨てられた家屋多数を見つけたが、日常生活は順調に進んでいる、と結論した。「欧州の生活スタイルは、ビリヤード付レストランの形で既にここまで入り込んでいる」、とピモダンは記録している(272~274頁)。

台南から打狗(1920年から高雄)まで行程の最終区間は、「反乱者の多数の強盗団」のため最も危険だと見られたので、視察団は6日船を乗って「台湾の真珠」と呼ばれる打狗まで旅行した。9日ピモダンはマイヤースとの会見を記録した。「打狗は、二つの岡の間に流れる狭い海峡に公海と繋がれている。一つの岡の上にイギリス領事館がある。もう一つの上にドクター・マイヤースは大きい別荘、本物の城〔*véritable château*〕を建てた。場所は山腹に残った古い要塞の廢墟のため、より美しくなった。ドクターはイギリスに生まれて、家族と一緒に台湾に長く滞在して、日本政府〔総督府〕顧問を勤める」(274~276頁)。残念ながら、ピモダンはマイヤースとの会話の内容を記録しなかった。

5. 寂しい雲林で天皇誕生日の祝賀

ピモダンの台湾日記で最も興味深いエピソードは雲林で行われた明治天皇誕生日(11月3日)の祝賀行事だったと筆者は考える。このフランス人が雲林を見たのは雲林虐殺事件の直後であった⁽⁶⁾。

この町は最後の反乱の中心であった。今日祝賀される天皇誕生日のために準備された凱旋門、鎖型の花飾り、国旗は町の寂しさを強調している。建物の廃墟、崩壊した壁、黒焦げになった桁、瓦礫の山は、1871年の〔独仏〕戦争と〔パリ〕コンミュン後のパリ郊外を連想させる。匪賊はまだ農村を統治している。陸軍は雲林を守護している。私が林の外れで写真をとるために二百メートル離れた時、深慮ある日本人は私のそばに警備を送った。

町の広場で〔日本人〕将校と兵士は様々な娯楽を行った。風船玉の打ち上げ、子供のための運動会とゲーム、中国人興行団の芝居、花火、提灯のイルミネーション、酒の分配など。子供は喜びのあまり叫んで駆け回るが、大人は冷淡であった（269～270頁）。

この平凡なシーンに台湾での日本植民政策の全体がはっきり表れていると思われる。日本人は、現地の住民（中国人）を日本の習慣に慣らして、彼らを風船玉の打ち上げと酒の分配で遊ぶ「子供」と見なして、子供・青年を味方にして日本風に育てる方針であった。他方、「平定された」地域の大人は冷淡であり、密林に潜んだ原住民からの不断の脅威にさらされている状態であった。日記の途中に記録された日常生活上の興味深いエピソードもある。

日本軍人は、雲林の住民の冷淡さを見誤って、夜には歓迎会を開いた。ピモダンが記入したメニューによって洋食と和食が交互に供されたことが分かる。このフランス人は、和食を「バターと油がない、欧州人には殆ど食べられない代物」だと考えて、食器と膳立ての美しさのみを認めた（270～271頁）。

6. 澎湖諸島でフランス海軍軍人を追悼

11月14日ピモダンは、「台湾に比べて〔衛生的に〕より健康によい」澎湖諸島の馬公で現地の感想を記録した。このフランス人の感想は、主に清仏戦争の極東艦隊と関係があって一言でいえば寂しいということだった。極東艦隊を指揮したクールベ海軍大将は1885年6月11日馬公で死亡した。フランス海軍軍人は、クールベの死体に防腐術を施して母国へ埋葬のために発送したが、大将が死亡したこの町には慰霊碑を建てた。日本統治前の10年間、現地の中国人はクールベの慰霊碑も澎湖諸島で死亡したフランス海軍人兵士の墓地も手入れしなかったため、それらは完全に荒れはてていた。日本が列島を占領した後、現地の本部の将校は慰霊碑を改修して、のちにフランスと日本はその手入れに関して協定を締結した。

ピモダンは、クールベの慰霊碑とその側に埋まっているフランス海軍将校二人の墓に参り、「フランス人墓地」ともいうべきこの霊園を見学した。フランス人兵士とフランス陸海軍を手伝った一般の中国人も埋葬されている。その墓地は全く荒れはてていて、きれいな日本人墓地の隣により寂しく見えた。感動したピモダンは、川上中将の支援を要請して、現地の日本軍人と墓地の整理に関して打ち合わせた。墓地に建てられた石碑にラテン語の新しい銘が刻まれた(276～278頁)。

澎湖諸島を訪した後、視察団は廈門、香港、ハイフォン、ハノイを訪問した(278～286頁)。

おわりに

フランス陸軍将校ピモダン少佐は、日本統治時代の初期、台湾近代史の転換期(1896年秋)に台湾を訪問した数少ない欧米人の一人であった。

民族問題に関心のある軍人ピモダンは、日本の新しい植民地において異文化・異文明として日本人と現地中国人および原住民との関係の複雑さを深く理解して、ゲリラ戦争と反ゲリラ戦争の戦略と戦術に特別な注意を向けた。また彼はフランスで軍事教育を受けた日本陸軍将校の専門的水準を高く評価した。しかし、ピモダンの旅行記（日記）は、現在忘れ去られている資料になった。その文書は、未知の情報が殆どないと言えるが、現地の「生々しい」感想、当時の雰囲気の記録として史料の価値があると筆者が考える。史学的に見ればピモダンが語った出来事は「野史」（la petite histoire）であるが、「野史」がなければ「正史」（la grande histoire）の研究が不可能になる。

《註》

本稿の引用は全て筆者がフランス語から翻訳したものである。

- (1) Le commandant de Pimodan, *Promenades en Extrême-Orient (1895-1898)* (Paris: Honoré Champion, 1900). 頁番号は本文に括弧に入れて表示した。
- (2) ピモダンは、地名「Formose」のみを利用するが、本稿で引用された文書の翻訳では「台湾」とした。
- (3) ピモダンの記録には、全ての地名が日本語の音訳で書かれおり、「Taipeh」（タイペー）のみが例外である。「日本の征服の後タイペーはタイオク〔ママ〕と言われている。台湾の全ての町には中国語の地名と日本語の地名があり、漢字は同じだが、発音が全く違う」（254頁）とピモダンはフランス人読者に説明している。
- (4) マイヤースとその意見書について詳しくは、長谷部茂「日本の台湾統治に関わった英国人——台湾総督府顧問マイヤース事例」（『拓殖大学国際協力研究機構活動報告書 平成26年度』（拓殖大学, 2015年）65~72頁）；長谷部茂「西洋人は日本統治以前の台湾社会をどう見たか——総督府英国人顧問マイヤース『台湾自治制度』意見書を事例として」（『拓殖大学台湾研究』創刊号（2017年）29~52頁）。
- (5) 詳しくは、斎藤磯雄『隨筆集 ピモダン館』（廣濟堂, 1970年）。
- (6) 詳しくは、柏木一郎「日清戦争後における台湾の治安問題——雲林虐殺事件を中心して」（『法政史学』第48号（1996年）120~140頁）。